

常滑市民俗資料館

# 友の会だより

第5号



木造十一面観音立像 宝樹院蔵

平成元年3月発行(1989)

# 宝樹院の梵鐘について

友の会顧問 山 田 陶 山

常滑市の宝樹院は、正住院第7世の空隣守覚上人が大永元年（1521年）正月に龍松山を退隠して奥条の海沿いの丘の上に一字を建立して、常光山宝樹院を開創せられたのは今日を去る468年の昔であります。以来おいおい寺運隆昌に向かって大いに寺観をととのえましたが、尚容易に梵鐘を備えることが出来ず、歴代の住僧や檀信徒のひたすらに念願するところでしたが第12代の住持、桂空閑嶺上人のとき、先ず鐘楼を建造しました。以後もさらに浄財を募り準備をととのえ享保12年（1727年）2月第14代瑞空恒仙和尚の代にいたり漸く大梵鐘を铸造して鐘楼に吊り上げることが叶い、ここに開山以来僧俗200余年におよぶ素願を達成し得たのであります。この梵鐘は铸造の技術、素材の鐘青銅の質、共によるしきにや殷々たる其の音色は言語に絶して美しく朝夕べに撞きならず鐘の聲は遠近の里人の心耳を澄ましめ、心なき子供の私共さえも晩鐘の音色には何となく哀愁の思いを催しておりましたが第2次大戦の末期に、戦況日に日に吾に不利なる頃、軍需資材の欠乏も甚だしく遂に各地に建設せられてあった偉人、名士の銅像や個人所蔵の美術品などと共に各寺院の梵鐘や仏具にいたるまで応召供出という事態に立ち至りました。長い年月にわたる当山代々の僧侶や檀家そのほか有縁の大衆の心願努力を結集して漸くにして開鑄され千年の後までもと頼みきっていた我が宝樹院の梵鐘も供出せざるを得ず遂にお別れの撞き納めの日が来ました。私も寺へ馳せてゆき、此の名鐘に名残りを惜しみましたが、せめてもの思い出種にと其の鐘銘を写し取っておきました。今この手控えを取り

出して読んで見ると感慨一人なるものがあります。この鐘銘、並びに序文は檀林、玉松山祐福寺の教山大和尚の撰になり実に含蓄ある名文ですが全部漢文ですから便宜上、要点を解説して書き下し文に改めておきました。

宝樹院の鐘銘ならびに序  
知多郡常滑の辺邑宝樹院は浄業の精舎にして西山流の末派なり、仏殿海辺に臨んで法水をそそいで能く群萌をうるおす、僧房整規して則ち曉夢を驚かし自ずから心地を開かしむ。道に順って具問するも梵鐘の備え末だ有らず、また数代希冀する所は一に兜氏を招きて鑄するに在り、浄財己に得たりと雖ども晨夕遐邇（朝夕遠近）空しく耳を傾くるも裨助する所亡かりしなり。嗚呼時なるかな、吾人の夙願いますでに成熟せり、拏躍に任えざる者なり。

銘に曰く、彼の土の宝樹に閻浮金を觀ず、蒲牢（鈞鐘）起吼して、乃ち自今を利すべし、泥犁（地獄）の苦息に魚鼈も来り尋ぬ、円通當に選ぶべし、海潮の音に和するを時に享保12丁未歳2月吉辰、前任祐福寺教山誌す、宝樹院14世現住瑞空恒仙代

享保12年の頃には（約260余年前）寺門の前に澎湃として寄せかえす波の音は称名念仏の聲や撞き鳴らす梵鐘の響きと相和して莊嚴浄土を偲ばしめるものが有ったことと思われます。古老の談によれば現在の字瀬木という所は、昔は殆んど海だったのだが海潮を塞きとめて陸地を築き出したもので、地名の語源はセキに在るのだ、と伝えられていますが、此の鐘銘は正に其の口碑を裏付けする確実な資料と思われます。まことに天地の間、人も物も、山容水態といえ

ども寸時も停滞せず変転して極まることなきは世の姿であります。

世の中は、なにか常なる明日香川、きのうの淵ぞ 今日あしたは瀬になる。(古今集、巻18)  
なお祐福寺は平安時代の末頃に創建された浄土門しんごもんの古刹こせつで張州府志、および尾張志(尾州藩の官撰地誌)にも詳しく記されており中部地方屈

指の大寺であります。昔は浄土宗四山光明寺、並びに東山禅林寺の双方に所属していたのですが、現在は禅林寺派の中本山で愛知県東郷町春木に所在しております。教山師は前住とあるから当時は隠居しておられたのだが此のお方については機を得て祐福寺へ行って詳細調査してみたく思っております。(1989年1月稿)

現在の宝樹院の鐘楼



## 歴史資料を基本にした常滑焼製品開発一つの道

村田 正 雄

明治16年、工部省派遣の内藤陽三、寺内信一、の両師は、常滑に美術研究所を設け、当時の常滑陶人たちに高度な西洋技術を教え、製品の創作指導をしたが、それらの遺作品の中には、茶室庭園用大手洗鉢、真焼大型手焙り火鉢(常滑市民俗資料展示品)などを始め、大型や、小型のものがあって、今の常滑焼技術も及ばぬほどの名作や、逸品が多く見られます。そうした明治時代の常滑焼技術を、今の常滑焼技術が活用してゆく新しい陶業研究の試みは、新商品の開発に迫られている常滑窯業界にとって、一つの課題ではないかと思われま

す。所で甕や、焼酎瓶、土管、型押し小細工の鉢物などの作品を、私達がいま改めてよく見ると、

それはそのまゝが日本人的な彫刻美の造形であったことに気付くのであります。そのためか、日本の建物内や庭園の住いの中で、土味豊かな古典風常滑焼があしらわれている事を知るとき、それが静かな空間生活の調和に役立っており、花入れや、庭園用具としても、今の人々の日常生活の中に無理なく、自然な形として取り入れられている事に、気付くのであります。

それら江戸時代からの常滑焼である赤もの、真焼もの、朱泥もの、小細工もの、などの素朴な雑器に対して、明治の美術研究所は、高級な欧風の図案を加え、焼成法なども技術革新を行ない、新製品の創作研究を行なったおかげで爾後、常滑陶業は飛躍的な発展をする事になりました。

然し、それらの製陶技術は総てが伝承される事なく、近代工業化の波に乗り得た製品だけが繁栄して百年の歳月が過ぎようとしています。さて、いま私たちは、再び百年前に想いをかえらせ、常滑窯業の原点を求め、祖先が拓いた常滑焼創造の力の中へ、更に現代の私たちが持つ

技術の力を注いでゆくことも、これからの新しい常滑焼商品を開発してゆく一つの道ではないかと私は思うのであります。

◎「一塊の土克く財産を産む」

故 相京伴信先生の言葉

## 知多の昔ばなし

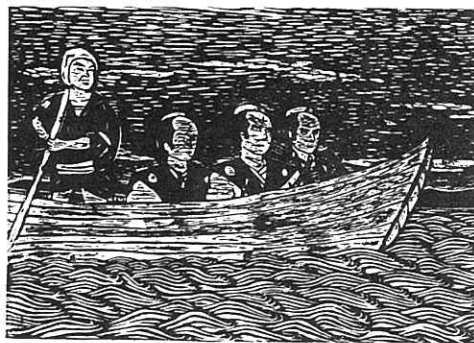
2月1日から18日迄、鬼崎公民館にて知多の昔話し版画展が開催されていた。この版画展は鬼崎中学校の美術部の生徒が、吉田 弘先生のご指導によって、昔からこの知多地方に伝わるむかし話を幻想的に版画に彫り、生徒の美術感覚の向上を促すために開催されたと聞く。約80点の作品には、夫々のテーマに合わせた昔ばなしが手短に紹介されていて、見易く先生と生徒の苦勞の跡が偲ばれ、私も感心しながら鑑賞させて頂きました。

その出品作の中の一つに(柴舟権現)という題で船頭数人が小舟に乗り櫓漕ぎをしている版画が有り、大略次のような説明が書かれていた。

天正10年6月、京都本能寺で織田信長が討たれ、其の頃堺に居た徳川家康は早く岡崎の自分の城へ戻ろうとしたが、既に敵の明智勢多く、伊賀越えて苦勞しつつ、やっとの思いで伊勢の白子の浜へ迎り着いた。其処で柴を積んだ舟を借り、常滑の浜まで漕ぎ逃げた。常滑では衣川八兵衛に大変に手厚いもてなしを受け成岩の常楽寺まで案内を受け、再び舟で三河に渡り、無事に岡崎の城へ戻りました。その後家康は幕府を開き、多くの人々から世の救い主、権現さまと言われるようになり、常滑でも家康が上陸した所へ祠を建てて権現さんと呼んでお祭りをするようになり、今も

毎年6月には市場の祭りとして賑わっている。以上が説明の概要であります。私は此処で、昔ばなしにまつわる、市場の権現さまの御神体に関わる言い伝えを、事実関係も含めながら、私の記憶も呼び戻しつつ、お話ししたいと思います。言い伝えによりますと家康が常滑を立つ際に世話になった庄屋の八兵衛に、その礼として、家康の所持品の内、三点を置いて行った。其の中の一点が武将の持つ、お守りさん、即ち家康の護り本尊、観音さまの像でした。此の像はその後、約400年近くも代々八兵衛の子孫に引き継がれて来ていましたが、大正11年の8月頃、その当時の常滑の町長さんと榊原さんと小学校の校長で中村さんと言う方が、お二人で、東京に住む八兵衛の子孫宅を訪れ、常滑の市場に深い係わりの有る御神体、是非とも寄付して下さいとの申し出あり、祠を建ててお祭りして頂く事を条件に、常滑市に寄贈されたものです。後日談になって恐縮ですが、これが一年後でしたら関東の大震災で、御仏像も家財ともども灰塵に帰っていた事でしょう。東京から常滑へ移して暫くの間、一時お預かりをお願いしたお家や、旧役場の物置などでは、物騒な事件が起こったりしたと聞き及んでいますが、粗末に扱おうと祟りが有りそうですよ。昔話と現実を組み合わせると、話です。

平成になり、科学的情報化時代の、新しい世代になりつつありますが、昔ばなしも亦、楽しいものです。私も民俗資料館友の会の一人として、皆さんと共に楽しくやっています。 S. K. 生



続々知多のむかし話より

## 戦争と常滑焼

渡 辺 栄 造

日華事変が勃発して満2年目に入ると、資源小国のわが国は、もう鉄など金属の不足が顕著になり、昭和14年(1939)2月には不用不急の鉄製品の回収が始まり、鉄柵や橋の欄干などの回収から、昭和16年(1941)になると一般家庭の余分の鍋釜、湯沸しなどから、寺院の花瓶、香炉やローソク立から後には梵鐘まで供出することになる。

寺院の梵鐘を軍需用に供出することは、すでにこの時から80年程前の安政2年(1855)、米英等欧米列強から強硬に開国を迫られた幕府が、彼等と和親条約を締結したことを怒った攘夷派が、急拠大砲を鑄造する為、朝廷の名をかりて諸国に寺院の梵鐘を供出するよう命令したことがあった。

しかしその直後安政の大地震が起こって江戸を中心として甚大な損害を蒙り、梵鐘供出の仏罰だと人々から蔭口をたゞかれたりして、どの程度の成果があったかは詳らかではない。

今度の梵鐘供出も、昭和19年(1944)12月の東南海地震(M8.0)に次いで、翌月三河大地震(M7.1)と2回に亘る大地震に見舞われる破目になったのは奇しき因縁といえる。

金属製品が払底すると、その代用品が必要になる。

瀬戸では昭和15年(1940)頃から、ガスコンロや十能から焼網など、家庭用金物類の代用品が盛んに生産された。

恰度その頃、常滑では米の増産の為、農地改良用の農耕土管の需要が急増してきたものの、肝心な石炭が不足の為、みすみす操短を余儀なくされていた。

そんななかで、常滑焼で出来る代用品として床下の風窓、溝を覆う簀蓋、水溜桝(マンホール)や道路の停止線に埋め込む交通標識釘等の生産が始まった。

カタログに曰く“鉄類節約の為代用品ではあるが、優れた特徴を備えているので、この機会に陶製品となるべき新製品である”とし、“鋳鉄製に比べ耐圧力が劣る点は肉厚を厚くして補ってあるが、重量は大差ない、食塩釉薬が施してあるので、鉄のように盗難にかゝらない”と各地で鉄製の簀蓋が盗まれていることを裏付けている。

この代用品は、東京・大阪・名古屋・横浜などへ出荷された。そのなかに風窓を東京の乃木神社へ納入した記録があるのは面白い。

たゞ、国策に添う為とはいえ、やはりこの代用品では飯の喰える代物ではなかった。中国大陸での戦争を4年半も続けて来た上に、昭和16

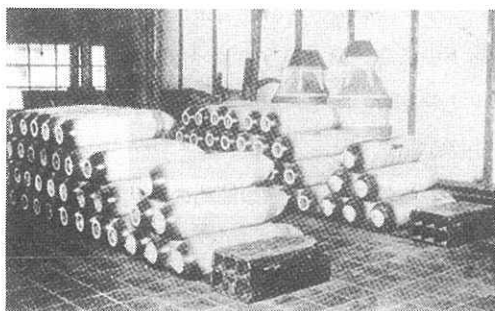
年(1941)12月、わが国はとうとう米、英両国に宣戦を布告し、太平洋戦争に突入すると、軍工廠や軍需工場への耐酸缶器や電纜管の需要が増加する一方、農耕土管の需要も激増して、常滑のやきもの業界は未曾有の盛況になった。

しかし、石炭の不足は益々深刻で、苦しい操短が続けられた。

太平洋戦争も緒戦の勝利はほんの半年くらいで、戦況はだんだん頹勢に傾き、南海の孤島ガダルカナルをめぐる激しい海空戦もわが軍のガ島撤退で、一段落した昭和18年春頃、伊奈製陶(現INAX)へ陸軍航空本部から極秘で缶器製爆弾2~30本の試作命令が来た。

長さは1m位で中に火薬を詰め、先端に真管を取り付け、後尾に小さな翼を取付けるネジ穴をあける設計だった。

戦時とはいえ、例年のように桜が満開になった4月、念入りな製作によって設計図通りに完



陶製爆弾

成した弾体を納入し、試験の結果を待った。間もなく第三陸軍航空技術研究所から今度は7~80本の試作命令を受け、暑い盛りの8月初め無事納入した。

しかし、試験の結果火薬はやはりやきものに対し力が強過ぎて弾体が木端みじんとなり、軍の期待した成果が得られなかったらしく、缶器製爆弾の本格生産は実現しなかった。

昭和18年(1943)秋の獲り入れが始まった10月、農林省は緊急に食糧増産をすることを

決定し、愛知県庁から常滑へ大量の農耕土管を生産するよう命令がきた。

内径9cmから24cm、長さは60cmで銕無し のツッポ土管を616万本、納期は昭和19年8月まで、喉から手の出るほど欲しい焼成用の石炭は十分に割当てるといふ。



農耕土管の生産に励む女子勤労報国隊

納入先は東北地方六県を中心に、全国20府県に及び、働き手を戦地へ送った手不足は、東北地方から勤労報国隊が来常、地元でも常滑工業、常滑高女の生徒や各種団体の人々も加わって、夜を日についでの生産が行なわれた。この農耕土管の生産に携った人員は、6か月間で実に延3万5,600人にも及び、常滑のやきもの史上空前の土管ブームとなった。

農耕土管の生産で常滑中が大騒ぎになっている頃、瀬戸では相模海軍工廠の命令で、陶製の手榴弾(手投げ弾)造りが始っていた。破れ物のやきものを直接兵器に使うことなど到底考えられなかったことが、とうとう現実になってきた。

野球ボールの少し大きい程度の半球をプレスで成形し、これをつなぎ合わせて形をつくるもので、丸いためころがり易く、乾燥にも焼成にも苦労を重ねて、目標の日産1万6,000個を達成した。

昭和19年(1944)6月、米軍は遂にサイパン島に上陸、それを阻止しようとしたマリアナ沖海戦に失敗した軍は、本土防衛の第一線を硫黄島とし、この陶製手榴弾を大量に送り、更に

生産地の瀬戸とその後生産に加わった信楽、備前へ第2便に間に合うよう急生産を命令した。

しかし、多くの老若男女が必死の努力で第2次の船積を終った直後、硫黄島の守備隊は全滅した。

したがって、この陶製手榴弾がどの程度実戦効果を挙げたかは、今なお不明である。

心配していたサイパン島から遂に敵機が本土空襲に姿を現した昭和19年の暮頃から、瀬戸に大阪造幣局瀬戸出張所が設けられ、京都や有田と分担して陶製の貨幣作りが始っていた。1銭、5銭、10銭の三種類ながら貨幣であることから、検査が厳重で最終歩留りは50%で苦労が続いていたが、それでも終戦時には1千万個が完成していたといわれる。

しかし、遂に腸の目を見ることなく、まぼろしの陶貨で終ることになった。

さて、瀬戸で陶貨の生産計画がすすんでいた昭和19年7月下旬、伊奈製陶へ海軍省燃料局から呂号兵器の生産命令がきた。

正式には呂号乙薬甲液製造装置といふ、酸やアルカリに最も強い耐酸坩堝器を、ロケット推進に必要な高度の濃縮過酸化水素製造装置に用いるものだという。

その中味は、大量の大小貯蔵槽、反応塔、真空瓶、各種パイプ、蒸溜装置等を8月末から11月中頃までに納入せよというもので、この新兵

器は航空機以上の急要品だという。

伊奈製陶は、早速それまでの受注品を全部辞退し、中・小型の貯蔵槽など比較的簡単な物は、地域の中小工場を指導して製造を委託することになった。

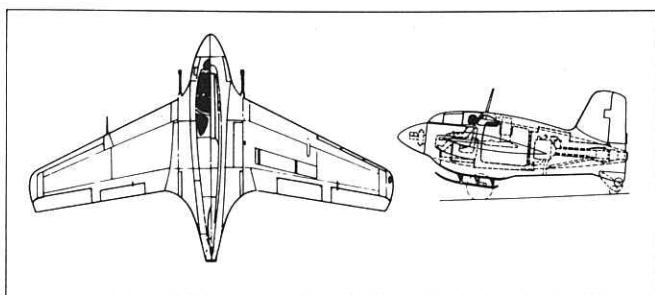
ほどなく、これに従事する人はすべて徴用となり、動員学徒や更に各地から徴用工具も到着して、常滑は急速に㊤生産一色に変わっていった。

そしてついには小学校の学童までもこれの生産に当り、勝つための必死の努力が続いた。

たゞ常滑焼には、昔これに似たことはあった。恰度これより90年ほど前の嘉永6年(1853)の夏、ペリー艦隊が浦賀へ来たり、ロシヤ艦隊が長崎へ現われたりで、びっくりした各藩が海防に力を注いだが、その時尾張藩でも常滑へ急いで大量の煙硝壺を注文してきたことがあった。

今度の呂号兵器は、それと比較すべくもないが、すべてが特殊の形状で、殆んどが手作りの製品では、とても軍の要求する期日に納入できるものではなかったし、第二次の追加命令もあって、遂に昭和20年(1945)8月の終戦まで、生産は続けられることになった。

しかし、最初に設備を完成した四日市の第二海軍燃料廠が、運転開始の直前に東南海地震で破損し、次いで米軍機の大爆撃で大破するなど㊤は暗たんとしたスタートだった。



ロケット戦闘機“秋月”



㊤ 真空瓶

⑩製品は上記の外、各地の化学工業会社から人絹、レーヨン工場や、遠くは北朝鮮や満州（現中国東北部）までの39工場に発送した。

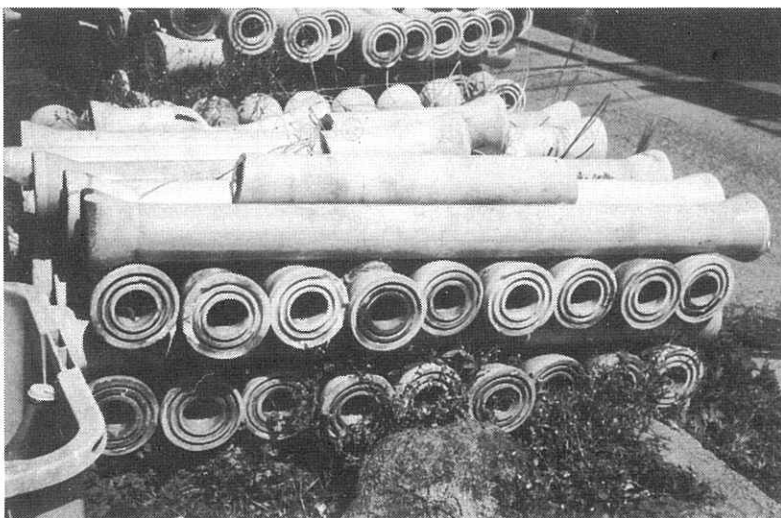
ヨーロッパで連合軍を悩ませた、ドイツのV2ロケットの技術を取り入れ、敵のB29爆撃機を一挙に撃墜するために設計された。わが国初のロケット戦闘機“秋水”が、終戦の直前に試験飛行に失敗したことも、終戦の日に二度目の試験飛行の予定だったことも、人々は軍の機

密として知る由もなく、この事実を耳にしたのはそれから30年近く年を経てからであった。

このよう、⑪は極秘のペールの彼方に消えていった秘密兵器ではあったが、今もなお常滑のあちこちで、雑草に半ば埋もれ、風雨に打たれるまゝ取残されている大きな白い甕（貯蔵槽）は、かつて必死で戦いに挑んだ常滑の“やきもの造り”の人達の無言の証人であり、貴重な呂号兵器の遺蹟とも言えよう。



⑪ 貯蔵槽



⑫ コニカルフレンジパイプ



# 細江町見学記

増田 静子

刈り取られて切株の並ぶ田圃の間を通り、色づいた蜜柑がたわよになる畑が多くなった頃、右手に浜名湖が見え、やがて長楽寺に着く。少し坂を登ると古い土塀につづく、山門も古く落ちついて、並べられた大輪の菊が出迎えて呉れる。マイクを持ったおじさんの案内で、お庭を



見せて戴く。小堀遠州の作で、手前の池に松が形よく張り出し鶴と亀の石組があり、なだらかに上へと満天星つゝじが沢山に植えられ、もう少しで見頃に色づくという。遥か向こうの山の方に本堂があったそうだが、今は無く借景として山が見える。先ずお庭を廻遊させて貰う。一番高い所からきらきらと浜名湖が眺められ気分をよくして東方へ降りて来ると小さめの池のほとりに出る。NHKのドラマ武田信玄のロケーションがありましたとの説明がある。

そして昔の本堂の建材で作ったと言われる鐘楼と山門の所へ着く。鐘楼は立派で鐘は少し小さめだが鎌倉時代の作で静岡県下で最古のものだそう。客殿に上り並べられた展示品を拝見する。鎧具足一式太刀一振が立派に飾られた横に陣笠が幾つかと、その下に抜身の太刀が数振飾られ、戦の錦絵や能面など幾つかあり、お寺の展示品としてなぜあるのか聞きそびれて残念に思いました。四百年の歴史を持つという山門

に別れ龍潭寺に向かう。門前のお店で昼食を戴き龍潭寺へ入る。廊下は左甚五郎作の鶯張りで大勢が踏むと賑やかすぎる位に鳴る。左甚五郎作の龍の彫刻は白くさほど大きくはないが少し高い所から睨んでいる。お庭は長楽寺と同じ小堀遠州作でやはり「どうだん」が植えられ、少し奥行がないが右端に「くろがねもち」の大木が真赤な実をいっぱいつけていて見事だった。左手には井伊家の御霊廟があり、この寺は井伊家の菩提寺となっているようだ。ゆっくりと座りお庭を拝見すると何となく落ちついた気分になる。表庭の山門は新しく、狛犬が後に、前には仁王様が金網の中に入っている。仁王様は何で出来ているのか、なんとなく威厳と迫力に欠ける感じがする。

次の歴史民俗資料館は姫街道沿いの細江神社を通り抜けた所にあり、まだ新しい建物でした。

一階は生活用具の展示で農機具やら鰻取りの道具、それに畳表を作る機などあり、以前は丈夫な畳表と評判がよく、随分作られていたが、今は少ないと説明される。二階はナウマン象の歯の化石など出土品が並べられ、銅鐸も最近八個目が出土したそうで、意外に大きく又綺麗なのに驚く。姫街道の気賀の関所を通行の為の書付など古文書も並べられてある。小じんまりとしているが由緒ある町だと感じた。少し昔にタイムスリップをした気分、現代の家路に帰り着きました。

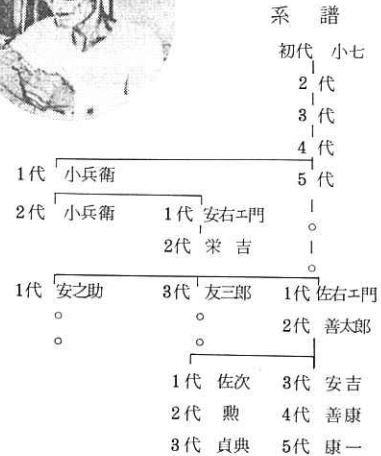


# 家系譜一覽表を作りて

私の住んで居ります成岩板山の西の端大湯部落は江戸時代に書かれた徇行記には「25戸ほどあり、小百姓ばかりで村立す」と、それから明治中頃の記録に30戸位に増え、大正4年に34戸石川姓一軒他は全部岩橋姓であり、昭和16年47軒が増えて石川姓2、他姓3軒他は全部岩橋姓です。昭和37年には67件、岩橋54、他姓13に増え、昭和62年には125軒、岩橋70軒、他姓55軒、大変な増加で構成されて居る部落です。これを見ましても岩橋姓の家が主力であり、先祖は何処より来て何軒位から部落に成ったかを調査しようと思ひ立ちました。私も建設会社を長らく務めて今度退社しました。毎日が暇が出来た現在古文書の部会に入会して昔の事に関心を持つ様になりました。其れで今迄も自分の家の先祖の事も充分知る事も出来ず岩橋姓ばかりなのに何処の家が何処の分家・先祖の生立を解明する様にと、御寺の役員と一緒に務めた同志に話し二人で調査に乗り出しました。先づ第一に部落の長老の人に昔の事を聞き、第二に各戸に廻り過去帳の戒名を見せて頂き死亡年別に配列し、男女別に俗名の解るのは調べ一覽表を作り、其れも基礎にして安養寺の過去帳と照合しました。都合の良い事には全部安養寺に有りましたので、だが安養寺には天保年間位までしか有りません。それで常楽寺の下寺で安養寺の御手附の超世院に頼み過去帳を拝見させて頂き調査せしに寛政年間位まで其れ以前のが解りません。最後は常楽寺に御願ひ致し二人で二日間過去帳を一号から調査しました。なにしろ檀家が沢山で板山大湯のみ拾い出すのは大変でした。戒名のみで俗名の無い



岩橋佐次



のが大部分で死亡年月日と家の名称のみを頼りに出来るだけ調査しました。調べたのを家々に表にして見ました。死亡年月日、性別、俗名、年齢と順次書出し、代数をきめて表にしました。それで分かりました事は何処の家でも親の位牌を持って分家した事が解りました。何処の家の何代から何処の家が分家したかが良く解りました。其れで古い年代から順次表に書入れ、分家から分家へと新らしく現在まで調べ、色々検討して出来たのを假刷して古い家に見せて確認して頂き安養寺住職に見て頂き不明な所は其儘にして一覽表を作りました。岩橋姓五軒、石川姓一軒迄調べました所、其れ以前は調査方法無く、一応調査終了としてコピーに致し全戸に配布しました。皆様の中にも何処の分家かが解らなかった家が沢山出て来て非常に喜ばれました。寺の住職も板山に転住されて四年目にて檀家の様子が充分解らなくて困ると言われて居た所で、非常に参考になると喜んで頂き、私も本当に少しは人の為になったかと嬉しく思い、今後の古文書研究に力が入って来ました。今は大湯部落の歴史の調査に掛っています。

# 協力部会の近況

八井 三津男

陽春4月、桜の開花と共に発足して半歳、友の会協力部会の記録から、その一部をお知らせします。

8月28日 晴

入出の多い「常滑焼まつり」に比して、少ない8月例会だった。然しそれに反して中味は濃い内容でした。テーマは「民俗資料館について学ぶ」(2) 講師 長谷川館長

まづ博物館の語原から始まり、博物館機能の三要素、設置基準、収集三原則等、兎に角系統だってキチッとやらなければ、倉庫化してしまうと云うこと。次いで常滑市民俗資料館の沿革、運営内容を教わり、見学会へと移る。

「知識欲のない人達にも考えると云うことを刺激し、疑問を起こさせ、ひらめきを感じさせる」という今月例会資料の一文は出席者には、忘れてはならない一項。

車に分乗して登窯見学。美しく修復されたのに驚く、「焼物まつり」を兼ねて散歩道を訪ねて来た人達は、運よく我々同様窯場の中へ入れて貰い、焚口をのぞく人、しゃがんで狭間穴に手を入れる人、室内で連鉢と並んでカメラのシャッターをきる人、と外来者は大喜び。珍しい窯に感嘆して暫く立ち去らず門戸を閉じるにしのびなかった。

築窯の際のアーチの木枠がキチンと残されている。そのこまかい心遣い嬉しく感じる。感謝の気持の一端として周辺の草引きをして資料館へ帰り今月の例会を散会する。時計の針は4時をトックに過ぎているのに驚く。

以上が例会のひとコマです。

最後に会員各位のご支援とご協力を心からお願いして筆を折ります。

## 会員募集中!!

友の会会員の更新並びに新規会員募集について平成元年3月末で昭和63年度会員の有効期間が切れます。引き続き会員更新の手続きをして頂きますようお願いいたします。またお知り合いの方にも広くご勧誘下さい。

民俗資料館友の会とは、郷土の文化遺産を守り、その歴史民俗に関する知識を深め、民俗資料館の活動に協力するとともに、会員相互の親睦をはかることを目的とする自主的団体です。

現在の友の会の活動としては毎月1回

- ① 資料館に収蔵中のものや市内各所で発見された古文書の解説と初心者の方の為解説練習
  - ② 郷土各地の歴史や遺蹟の研究
  - ③ 資料館の陳列品や収蔵品の検討、整理等
- ※ 年に2回位の予定で近隣各地の博物館、資料館などの見学旅行。

なおこの外、会員各位の希望や意見を取り入れて催しや史蹟めぐりなどやって行きたいと願っております。

会費は普通会員は年額1,000円で教材費などその都度、若干徴収させていただきます。

賛助会員は年額5,000円以上です。

入会の方法は直接、民俗資料館窓口へ御申込みいただくか、郵便振替口座へお払込下されば結構です。

振替番号は、名古屋4-101508番です。

### ご投稿を歓迎します

友の会では常時、ご投稿は受付しております。原稿は都合により補筆、修正、取捨選択をさせていただきます場合がありますので、ご了承下さい。その他ご意見やご要望がありましたらいつでも結構です。御申出下さい。

---

## 表紙紹介

---

### 木造十一面観音立像

昭和44年4月1日 常滑市指定文化財

奥條 宝樹院 高さ127.0 ㎝

寄木造り、玉眼嵌入りの十一面観世音菩薩なかなかの秀麗な作りで、彩色・金箔もよく残っている。体軀頭部のプロポーションもよく整い、やゝ足を開いて立つ姿にも動きがある。しかし裳のやや繁雑と思われる衣文や彫りは木像の制作年代が、それ程溯らないことを物語っている。このような作風は鎌倉中期、以後、宋朝美術の影響が、わが国の佛像彫刻に顕著にみられるからで、恐らく本像も室町時代頃の作ではないかと推定される。

### 企画展のご案内

わがやの歴史展～3～

(大野)平野助三郎家

会期 平成元年3月26日より  
4月30日まで

平成元年3月25日 発行

発行 常滑市民俗資料館友の会  
常滑市瀬木町4丁目203番地

TEL<05693>4-5290  
有線 54-429

印刷 有限会社 興 起 社